

漱石作品における女性像

(一)

柴田 奈美

はじめに

漱石は、明治三十七年から大正五年までの間に多くの作品を書いているが、その中に表われている基本的な思想や表現技法の中には、ほとんど変化することなく継続して書かれているものがある。それらの中の一つとして、思想については「女性観」「結婚観」が挙げられ、表現技法については「女性のタイプ分け」が挙げられよう。

思想については別稿で述べることとし、今回は「女性のタイプ分け」について考察したい。

漱石作品の女性像に、次のような二つのタイプ（よく「陽と陰の女」などと言われている）のあることは知られている。^(注1)

A、ある程度自意識が強いが不思議な魅力のある「新しい女」のタイプ（『草枕』の那美、『虞美人草』の藤尾、『三四郎』の美禰子、『彼岸過迄』の千代子などで代表される）

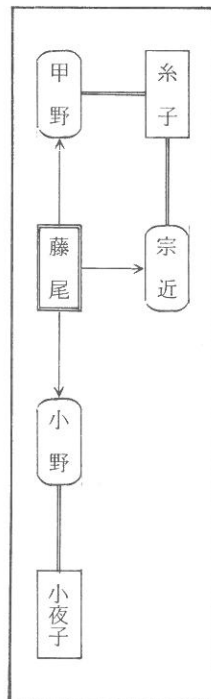
B、余り自分を表に出さないおとなしい感じの女性のタイプ（『虞美人草』の『小夜子』、『こころ』の静などで代表される）

このタイプ分けは、主として、それぞれの作品の女主人公をAとBとに分けたものであるが、一つの作品ごとに注目していくと、やはり二つのタイプが浮かび上がってくるのがわかる。この二つのタイプを、仮りに「陽の女」「陰の女」と名づけることにする。本論では、主な作品の「陽の女」と「陰の女」の組み合わせを明らかにし、考察を加えたい。

一、『虞美人草』における「陽の女」、「陰の女」
製作年代は逆になるが、まず、「陽の女」と「陰の女」のタイプの差が明らか
な『虞美人草』から考察したい。

陽の女——藤尾 陰の女——小夜子・糸子

「陽の女」が藤尾であることは、言うまでもない。
「陰の女」を、小夜子・糸子の二人と考えた理由は、次のとおりである。



藤尾という「陽の女」を取り囲んで、甲野（藤尾の兄）、宗近（藤尾の許婚）、小野（藤尾の恋人）という三人の男性が存在する。これら三人の男性は、それぞれいろいろな形で、「我」の強い藤尾に翻弄される。

『虞美人草』の中心を、藤尾と小野の恋愛と見るならば、藤尾を「陽」とすれば、小野の許婚でありながら小野に愛されず、「藤尾が一人出ると昨夕の様な女を五人殺します」（第13章、傍点引用者）とあるような、可憐な小夜子が、「陰の女」といえよう。

一方、甲野や宗近に視点を置くと、この男性二人を軽蔑し、憎悪する藤尾が「陽の女」であり、この二人の男性を理解し、愛する糸子が「陰の女」となる。

小夜子と糸子は、それぞれ小野、甲野と結ばれる結果となるが、それは「義」を中心におく小説の展開上、そういう結果になったままで、積極的に男性から愛される存在ではない。つまり、これら二人の女性の立場は、「陽の女」である藤尾の何らかの影響を受けて、傷ついた男性の安らぎの立場であったということである。

二、『我輩は猫である』における「陽の女」、「陰の女」

この作品は、諧謔味を表面に強く押し出してあるために、「陽」と「陰」の差は明らかではないが、存在は認められる。

陽の女——金田豊子 陰の女——九州の女

水島寒月は金田豊子を愛するが、博士になかなかないために、実業家の多々良三平に、豊子を奪われてしまう。しかし、九州には寒月の結婚すべき女性がいて、多々良が豊子と結婚する前に結婚した。

ここで注目すべき点は、寒月が豊子との愛に破れたことに、少しも傷ついているという点である。「陽の女」の位置にある豊子も滑稽に表現されているため、『虞美人草』のような深刻さは表われていない。

深刻さがなく、男性も傷つかなければ、「陰の女」の「安らぎの場」という役割も必要ないわけで、「九州の女」は糸子や小夜子のように生彩を帯びていない。

三、『草枕』における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——那美 陰の女——長良の乙女

長良の乙女は、二人の男性に想われて池に投身自殺をしようが、那美は「私なら、二人とも男妾にしてやる」（第4章）というほど、気の強い女である。

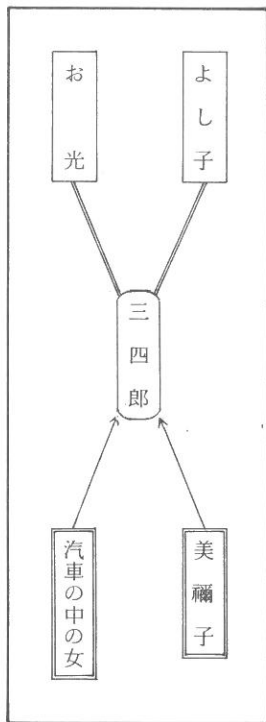
この小説は、非人情の世界を描いたものであり、俗世間での恋愛感情は存在しない。よって「那美—長良の乙女」の対立は、単に性格上の「陽」と「陰」の対立である。激しい那美の性格や言動の描写に、作者や読者が疲れた時に安らぐ場が、長良の乙女の描写であるといえよう。

四、『三四郎』における「陽の女」、「陰の女」

『三四郎』における、「陽の女」と「陰の女」の関係については、次のように考える。



主人公の三四郎を中心として、図示すると次のようになる。



美禰子の性格は、「あの女は心が乱暴だ」（第6章）と描かれてあるが、藤尾の激しさに比べれば大変穏やかになっている。美禰子の美しい容姿と思わせぶりの態度と重なり合って三四郎を苦しめたのは、「汽車の中で出会った女」の「『あなたはやつほど度胸のない方ですね』と云つて、にやりと笑つた」（第1章）という言動であった。これは、「陽の女」の持つ激しさが、端役の「汽車の中で出会った女」にほとんど移ったため、美禰子の性格が柔らいだものと考えられる。この二人の「陽の女」に苦しめられる三四郎にとって、安らぎの場となる女性二人が挙げられる。

一人は、三四郎を愛する九州の女、お光である。

二人目は、恋愛感情は表現されていないが、よし子の存在を挙げることができ、よし子についての描写には、次のようなものがある。

「その調子には初対面の女には見出す事の出来ない、安らかな音色があつた」（第3章）、「母の影が閃めいた」（同前）、「少しもわが自尊心を傷つけられたとは感じ得なかつた」（第5章）、「またどこか抜けてゐるやうな」（同前）、「この女に逢ふと重苦しい所が少しもなくなつて、しかも落付いた感じが起る」（第6章）

これらの表現は、美禰子の、「とても叶はないやうな気がどこかでした」(第5章)「あの女から馬鹿にされてゐるやうでもある。自分を愚弄した言葉かもしれない」(第6章)等という描写と対照的である。ストーリーの展開においても、美禰子に肩すかしを食わされて、三四郎が苦しんでいる時に、よし子の単独の登場が設定されている。

しかし、今まで見てきた作品(『草枕』は除く)に登場する「陰の女」のようには、よし子には恋愛感情がない。これは、三四郎を愛する女性としてお光が存在しているため、よし子は恋愛感情を持たず、三四郎の心を慰める役割のみをもつものと考ええる。

五、『彼岸過迄』における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——千代子 陰の女——百代子・作

須永と高木という二人の男性に愛され、「技巧」「プライド」「翻弄」の三つの要素を持つ千代子は、明らかに「陽の女」である。この三つの要素を持つている点では藤尾的であるが、須永の心理状態によっては、次のような描写が出てくるので、藤尾の持つ「悪」の性質はなくなってきた。

「純粹な気象を受けて生まれた」(第6章)「千代子の言語なり挙動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に蔵してゐるからではないくつて、余り女らしい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるからだと僕は固く信じて疑はないのである」(第11章)

ところが、須永の前に、高木という男性が現われ、須永が嫉妬するようになる。千代子の行為が「技巧的」で、自分を「翻弄」しているように思われてくる。その時に、須永の心を慰める女性として、百代子と作の二人を挙げることができる。

百代子は千代子の妹。「小暮は大人しくつて好いが、大暮は少し猛烈すぎる」(第11章)という松本の評や、「それがもし千代子でなくつて妹の百代子であったなら、たとい腹の中はどうであらうとも、その場は礼を云つて快く手巾を貰ひ受けたに違ひあるまいと思つた。たゞ千代子には夫が出来ないのである」(第11章)という須永の想像に表現されているとおり、激しい千代子と対照的な、穏やかな性格であることが指摘できる。

次の引用からわかるように、須永の千代子への気持ちを理解し、千代子の技巧を抑える役目をしている。

「千代子は思ひ出したように突然留つて、『あつ高木さんを誘ふのを忘れた』と云つた。百代子はすぐ僕の顔を見た」「『最う好いちやないの、此所迄きたんだから』と百代子が云つた。『だって妾先刻誘つて呉れつて頼まれたのよ』と千代子が云つた。百代子は又僕の顔を見て逡巡つた」(第18章)

以上のように、百代子は恋人としての性質は持たないが、須永を理解し、擁護する女性として作品の前半に登場し、千代子との対照を成している。

後半(須永が鎌倉から帰つてから)には、百代子の代わりに、作が「陰の女」の役割を果たしていることが、次の引用から指摘できる。作は須永の家の小間使である。

「作は固より好い器量の女でも何でもなかつた。けれども僕の前に出て畏こまる事より他に何も知つてゐない彼女の姿が、僕には如何に慎ましやかに如何に控目に、如何に女として憐れ深く見えたらう。彼女は恋の何物であるかを考へるさへ、自分の身分では既に生意氣過ぎると思ひ定めた様子で、大人しく坐つてゐた」(第26章)「落付いた、気安い、大人しやかな空気を愛した」(第26章)「二筆がきの朝顔の様な」(第29章)「材料がないから何も考へないと明言した作に、千代子といふハイカラな有毒の材料が与へられたのを憐れに眺めた」(第30章)「須永を愛し、焦燥立ちがっていた須永の頭を静めてくれるやうな女性であることがわかる。さらに、須永はこのような作を、「憐れに」思っているものの、恋愛の対象とは見ていないことも指摘できる。

六、『こころ』における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——静 陰の女——なし

静は「先生」と「K」という二人の男性に愛される。また、次の引用に見られるとおり、美禰子を彷彿させる表現が、結婚以前の静の描写に頻出しており、明らかに「陽の女」であるといえる。

「却つて平気でした」「恥ずかしがらないのです」(第13章)「決して子供ではなかつたのです」(同前)「知つてわざと遣るのか、知らないで無邪気に遣る

のか、其所の区別が一寸判然としない点がありました」（第34章）

しかし、美禰子のように「とても叶はない」と思わせる雰囲気はない。「御嬢さんは決して旨い方ではなかつたのです」（第11章）「何事も知らない妻の顔」（第51章）「女の胸にはすぐ夫が映ります。映るけれども、理由は解らないのです」（第52章）という部分には、拙な点や、鋭く男性の心に踏み入ることのできない弱さが、好意的に描かれている。

この拙な点や弱さが、藤尾や美禰子、千代子の持つ激しさを緩和し、静かな印象を与える女性にしていると考える。

また、「子供は何時迄経つたつて出来つこないよ」「天罰だからさ」（第8章）という先生の言葉にあるように、「罪」を背負い、子宝に恵まれない境遇・運命の女性でもある。この不幸を夫と共有することにより、夫婦の精神的な結び付きは、さらに深いものとなっている。

「陽の女」である静が、以上のような性質の女性として描かれているため、男性にとって「陰の女」の存在は不要となり、「陰の女」に該当する女性は存在しないのだと考える。

七、『門』における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——御米 陰の女——なし

御米は安井の妻であったが、安井の友人の宗助とかけおちしてしまう。

しかし、「陰の様に静かな女」（第14章）「自分で自分の状態を得意がって自覚する程の知識を有たなかつたから、同じ境遇にある詩人や文人などよりも、一層純粹であつた（第17章）等の描写のため、御米の積極的な行動を描写した、「某所迄買物出たから、序に寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩くり寛いだ話をして帰つた」（第14章）という部分や、宗助とかけおちをする行為の激しさを打ち消してしまっている。

さらに、かけおちをしたという「罪」、「病」、「子宝に恵まれない」という不幸な運命がより一層彼女を憐れな者とし、「罪」を夫と共有することにより、仲の良い夫婦となり得ている。この仲の良さは、「夫の顔を見た」の繰り返しの中に強く表われ、夫への信頼感の強さが窺われる。

以上述べたように、男性の安らぎの場としての性質も、御米は持っており、そのため「陰の女」の存在は不要となつたと考える。

八、『それから』における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——三千代 陰の女——令嬢

三千代は代助と平岡に愛され、一度は平岡の元に嫁ぐが、代助と再会した時に愛が再燃する。代助と駆け落ちすることを決心するが、病に倒れてしまう。

複数の男性に愛され、詩的な点は確かに「陽の女」であるが、「陽の女」の持つ激しさ（翻弄・技巧などの要素）はない。その代わりに、「病」「死」「罪」というイメージが強く、『門』の御米と同様に、子宝にも恵まれていない。

「病」「子宝に恵まれない」という要素が代助に「病気に冒された三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思」（第13章）わせ、「子供を亡くした三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思」（同前）わせて、次第に代助は三千代への愛を深めていくことになる。

このような三千代の陰に存在するのが、代助の見合いの相手の令嬢である。見合いをするが、代助も令嬢も相互に相手に対して無関心である。これは、三千代が代助にとって理想の女性であり、心を確かにつかめた女性であることにより、安らぎの場を求める必要のないためであろう。従って、令嬢は「陰の女」としての立場だけを与えられることとなつたと考える。令嬢についての描写は、次のような表面的なものに終わっている。

「たゞ簡単に、必要な言葉だけを点じては逃げた」「積極的に自分から梅子の心を動かさうと力めた形跡は殆どなかつた。たゞ物を云ふときに、少し首を横に曲げる癖があつた」「梅子は立つて、ピアノの蓋を開けて、『何か一つ如何ですか』と云ひながら令嬢を顧みた。令嬢は固より席を動かさなかつた」（第12章）

『それから』という作品を書く場合、漱石には道徳的な価値観を読者に如何にして忘れさせるかという、大きな課題があつた。一般常識からいえば、不貞を犯した三千代は最も性悪の女性である。それを作者の技巧によって、読者にも「理想の女性」と感じられるようにしなければならない。そうすると、代助の見合いの相手の令嬢が代助に対して「無償の愛」を捧げては、令嬢の方へ読者の同情が

移るおそれがあるので、令嬢の描写は前述のような、表面的な描写にとどめたものと考えられる。

九、『行人』における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——お直 陰の女——お兼・お貞

お直は一郎の妻であるが、夫に対しては、「彼女は決して温かい女ではなかった。けれども相手から熱を与えると、温め得る女であった」（第14章）とあるように消極的である。

一方、二郎には気易く話し掛け、「自分（二郎）には却て嬌態ともみえる不自然」（第31章）な態度を示し、「此不自然が、真面目な兄に甚だしい不愉快を与えるのではなからうか」（同前）と、二郎の心を動揺させる。

さらに、そのようなお直の態度のために、一郎はお直を「おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女」（第20章）だと感じて苦悩する。

次に引用するとおり、お直は『三四郎』の美禰子的な性質をもっており、一郎とともに二郎にとっても「陽の女」となっていることが指摘できる。

「彼女の前へ出た今の自分（二郎）が何だか彼女から一段低く見送られてゐる様な気がしてならなかつた。それなのに其所に一種の親しみを感じずには又居られなかつた」（第30章）「自分（二郎）は彼女と話してゐる間始終彼女から翻弄されつゝある様な心持が、自分に取つて不愉快であるべき筈なのに、却て愉快でならなかつた。」（第38章）

このお直に対して、「陰の女」として登場するのが、前半はお兼であり、後半はお貞である。

お兼は岡田の妻。岡田によく仕え、愛嬌がある、お兼についての描写を次に引用したい。

「お兼さんは、一寸見ると、派手好の女らしいが、夫は寧ろ色白な顔立や様子がさう思はせるので、性質からいふと普通の東京ものよりずつと地味であつた」（第11章）と好意的に描かれている。また、「岡田はすうと眼を通した丈で、『結構』と答へた。お兼さんは、てんで巻紙に手を触れなかつた」（同前）という表現には、無関心というよりも、「夫が結構なら……」という、夫への信頼感が読

み取れる。この点は、『門』の「御米はすぐ其手紙を拾つたが、別に読まうともしなかつた」という表現と同じである。また、「自分（二郎）は自分と同階級に属する未知の女に対する如く（お兼に対して）畏まつた言語をぼつ／＼使つた。岡田はそれが可笑しいのか、（中略）折節はお兼さんの顔を見て笑つた。けれどもお兼さんは澄ましてゐた」（第3章）には、人を馬鹿にした笑い方はしない女として描かれている。

さらに、次の部分に注目すると、理想の女性として描かれている『それから』の三千代や『門』の御米の持つ、「子宝に恵まれない」という要素を持つことがわかる。

「奥さん、子供が欲しありませんか。斯うやつて、一人で留守をしてゐると退屈するでせう」

「左様でも御座いませぬわ。私兄弟の多い家に生まれて大変苦労して育つた所為か、子供程親を意地見るものはないと思つて居りますから」

「だつて一人や二人は可いでせう。岡田君は子供がないと淋しくつて不可ないつて云つてましたよ」

お兼さんは何にも答へずに窓の外の方を眺めてゐた。顔を元へ戻しても、自分を見ずに、畳の上にある平野水の罎を見てゐた。自分は何にも気が付かなかつた。

それで又「奥さんは何故子供が出来ないんでせう」と聞いた。するとお兼さんは急に赤い顔をした。（第6章）

このように、理想の女性として描かれた御米や三千代などに共通した要素を持つているが、主人公として描かれた御米や三千代のようには生彩がない、一郎や二郎にとって、恋愛感情を伴う女性でもなく、お直の性格を際立たせるための「陰の女」であるといえよう。

後半に登場するのは、一郎の家の下女のお貞である。これという特徴もない、地味で優しい性格である。次のような描写が見られる。

「お貞さんには兄の意味が全く通じなかつたらしい。何と答えて好いか解らないので寧ろ途方に暮れた顔をしながら涙を眼に一杯溜めてゐた」（第6章）「お貞さんは相応の年をしてゐる癖に、宅中で一番初心な女であつた。是といふ特色はないが、何を云つても、ちき顔を赤くする所に変な愛嬌があつた」（第33章）

以上のような描写は、心の中を明かさぬ、とり澄ましたお直の様子とは対照的である。

また、「お貞さんが宅中で一番の呑気ものらしかった。（中略）一家団欒の時季とも見るべき例の晩餐の食卓が、一時重苦しい灰色の空気で鎖された折でさへ、お貞さん丈は其中に坐つて、平生と何の変わりもなく、給仕の盆を膝の上に載せたまま平気で控えてゐた」（第37章）には、お直に悩まされている二郎の心の安らぎの場としての性質が描かれている。

そして、「兄さんはお貞さんを宅中で一番怒の寡ない善良な人間だと云ふのです。あゝ云ふのが幸福に生れて来た人間だと云つて羨ましがるので。自分もあゝなりたいたいと云ふのです」（第49章）という部分には、一郎の心の安らぎの場としての性質が描かれている。

しかし、次にある通り、恋愛の対象としては考えられてはいない。

「君は其お貞さんとかいふ人と、斯うして一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」（中略）僕はお貞さんが幸福に生れた人だと云つた。けれども僕がお貞さんのために幸福になれるとは云やしない」（第51章）

お貞にも、二郎や一郎に対する恋愛感情はなく、性格的・雰囲氣的な安らぎの場となっている。

お兼がお直の性格を引き立たせるために登場した「陰の女」であるのに対し、お貞は二人の男性の心の安らぎの場としての重要な役割を果たす「陰の女」であるといえる。

十、「道草」における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——お住 陰の女——お縫

お住は健三の妻。腹で思っている事をそう無暗に口へ出して言わず、黙っている夫に対しては、用事の外は決して口を利かない冷淡な女性である。夫の健三にはその態度がわざと冷淡に構えている技巧の如く見えて、腹を立てる。この点は『行人』のお直の性格に一致する。「あらゆる意味から見ても、妻は夫に従属すべきものだ」と健三が考えるのに対し、お住は夫と独立した自己の存在を主張しようとする。

平生の彼等夫婦は、「顔さへ見れば自然何か云ひたくなるやうな仲の好い夫婦でもなかつた。又それ丈の親しみを現はずには、御互に取つてあまりに陳腐過ぎた」（第18章）という状態である。それが、時として異常な緊張が二人の間に生じると、「細君の心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家でも同情の結果、冥々の裡に細君の肩を持つといふ事は、或場合に於て、健三を敵とする意味に外ならなかつた」（第78章）と、健三を精神的苦痛に追ひやうしてしまう。このような性質から「陽の女」と考えられる。

しかし、病気の時には、次の描写に見られるように、「弱い憐れなもの」という存在として描かれている。

「幸にして自然は緩和剤としての歌私的里を細君に与へた。発作は都合よく二人の關係が緊張した間際に起つた」「枕辺に坐つて彼女の顔を見詰めてゐる健三の眼には何時でも不安が閃めいた。時としては不憫の念が凡てに打ち勝つた」「細君の病氣は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要であつた」（第78章）とあり、「病」という要素により、お住の性質の変わっていることがわかる。お住自身が、健三の安らぎの場としての役割も果たしているのである。よつて、お住という「陽の女」に対する「陰の女」は、特に必要にならないはずである。

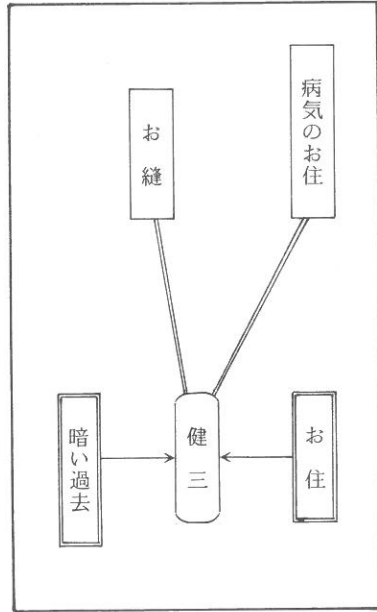
ところが、ここにお縫という「陰の女」が登場する。

お縫は島田の後妻の御藤の連れっ子。健三が学生の頃にお縫との結婚話があつたが、健三が若かつたのと、お縫の方が一つ年上であつたために、話は発展しなかつた。後に軍人の妻になるが、脊髄病に悩まされて、終に死んでしまう。しかし、そのことに対する健三の思ひは、次の引用に見られるとおり、決して暗いものではない。

「不治の病氣に悩まされてゐるといふお縫さんに就いての報知が健三の心を和げた」「強烈な好い印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁されてゐない其人の面影は、島田やお常のそれよりも、今の彼に取つて遙に尊かつた。人類に対する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から咬り得る点に於て。また漠然として散漫な人類を、比較的判明した一人の代表者に縮めて呉れる点に於て。——彼は死なうとしてゐる其人の姿を、同情の眼を開いて遠くに眺めた」（第62章）

これらには、健三の暗い過去を横切る一筋の明るい光として描かれている。このことからわかるように、「陰の女」としてのお縫の存在は、お住に対するものではなく、健三の生いたちに関係する暗い過去に対するものであつた。この意味

で安らぎの場となっている。しかし、恋人のように身近な存在ではなく、「遠くに眺め」られる、美しい絵のような存在であった。従って、関係図を示すと、次のようになるだろう。



十一、「明暗」における「陽の女」、「陰の女」

陽の女——お延・清子 陰の女——継子

お延は技巧的で、津田の心を唆かすと共に、時として妙に彼の気持ちを悪くさせる女性である。叔父と津田に愛され、「人から愛される天分を持っている」という自信がある。派手好きで虚栄心が強い。勘が鋭く、目から鼻に抜けるような女で、持てあますようなところがある。気位が高く、恥をかくぐらいなら死を選ぶというような激しさを待っている。

以上の点は、『虞美人草』の藤尾の性質にはほぼ一致する。

しかし、「貴方以外にあたしは憑り掛り所のない女なんですから。(中略)だから何うぞ安心しろと云つて下さい」(第149章)と言うように女の弱さも時々見せ、津田に「女は慰撫し易きもの」(同前)と思わせる隙もある。

全体的なお延の性質は、次の描写に代表されると考える。

「彼(津田)の性格にはお延ほどの詩がなかった」「お延の詩、彼の所謂妄想は、段々活躍し始めた。今迄死んでると許り思つて、弄り廻してゐた鳥の翅が

急に動き出すやうに見えた時、彼は変な気持ちが出て、すぐ会話を切り上げてしまった」(第154章)

このようなお延に対して登場するのが、お延の従妹の継子である。

継子は、他人の前では、大人しく、口も利けず、話す機会を与えられるのを苦痛に感じる程である。「自分に許された小天地のうちでは飽き迄放恣な癖に、其所から一步踏み出すと、急に謹慎の模範見たやうに疎んでしまふ」「丸で父母の監督によつて仕切られた家庭という籠の中で、さも愉快らしく囀る小鳥のような」(第67章)と、お延の眼を通して描かれており、旧い女性の性質を持っていることがわかる。性格に鋭さのあるお延とは対照的で、清子の登場前の安らぎの場としての存在である。

ところが、継子の津田に対する感情は、単なるあこがれのようなものであり、また、津田の継子に対する感情の描写は全くない。このことから、継子の「陰の女」としての役割は、お延の私の強さを強調することと共に、作者や読者に安らぎを与えるということであると考えられる。

作品の最後の方で、清子という「陽の女」が登場する。一人の男性を中心として、対等に生彩ある二人の「陽の女」が登場するのは、この作品だけである。

清子は、以前津田と交際していたが、機嫌の熟す間際になって、突然身を翻して他の男の元へ嫁いだ。清子の性質を描写したものと、次のような表現が見られる。

「津田の知つてゐる清子は決してせゝこましい女ではなかった。彼女は何時でも優悠してゐた。何時かと云へば寧ろ緩漫といふのが、彼女の氣質、又は氣質から出る彼女の動作に就いて下し得る特色かも知れなかつた」「普通の場合に起る手持無沙汰の感じの代りに、却つて一種の気楽さを味はつた彼には何の苦痛も来ずに済んだ」(第183章)

このように、全くお延の性質とは対照的である。しかし、津田に愛され、また愛されていたにもかかわらず身を翻した点で、「陽の女」であると考えられる。ただし、お延が津田に一寸の余裕も与えない「動」の女性であるのに対し、清子は「何時でも津田の声を受けて立」(第185章)つ受動的な「静」の印象の強い女性である。

清子の登場後、津田の心の中での、お延と清子の対比が度々描かれている。

「纏袍は果して宿の方が上等であつた。銘仙と糸織の区別は彼の眼にも一目瞭

然であつた。纏袍を見較べると共に、細君を前に置いて、内々心の中で考へた當時の事が再び意識の域上に現はれた。『お延と清子』（第17章）

「もし津田が室に入つて来た時、彼の気合を抜いて、間の合はない時分に、わざと縁側の隅から顔を出したものが、清子でなくつて、お延だつたら、それに対する津田の反応は果して何うだらう。『又何か細工をするな』彼はすぐ斯う思ふに違なかつた。所がお延でなくつて、清子によつて同じ所作が演ぜられたとなると結果は全然別になつた。『相変らず緩漫^{マダマダ}たな』緩漫と思ひ込んだ揚句、現に眼覚しい早技で取つて投げられてゐながら、津田は斯う評するより外に仕方がなかつた」（第18章）

「彼女（清子）の視線は窮屈であつた。然し彼女はあまりそれを苦にする様子もなかつた。お延ならすぐ姿勢を改めずにはいられないだらうといふ所を彼女は寧ろ落付いてゐた」（同前）

以上のように、お延と清子は性質の上から対照的に描かれている。お延は『虞美人草』の藤尾、『三四郎』の美禰子の系列にあり、清子は『それから』の三千代、『門』の御米の系列にあるといえよう。

さらに、体調が悪く、湯治にきているという清子登場の設定には、三千代・御米と同じ系列の女性をもつ「病」という要素を指摘できよう。

従つて、三千代、御米と同様に、清子自身が男性の安らぎの場となり得ているので、清子に対する「陰の女」は不要であり、存在しない。

おわりに

以上の考察から、「陽の女」のアクが強い程、「陽の女」の相手の男性や読者の心を安める働きをもつ「陰の女」が印象深く活動するという法則が成り立っているといえよう。

ところで、漱石は明治三十四年から『文学論』の著述を始めた。その第四編第六章第一節の「緩勢法」に、次のような記述がある。

「人事天然両界に通じて緩勢の必要は何人も疑ふ能はざるところなり。例へば醒覺に対する睡眠の如し。意識の活動劇しき醒覺の状態は二六時中にわたつて堪へ難きを以て、自然はこれに睡眠を配して外界の刺激を緩くす。例へば蒲焼に対する漬物の如し。鰻魚は最も脂肪に富む濃厚なる食物なるを以て之を和ぐるに清新

なる漬物を用ゆ」 「文学に於る緩勢法も亦此自然の要求に依じて成立す。長へに泣き、長へに怒るは吾人の堪ふる能はざる所、わが能力を緊張して適宜の度を越え、苦痛漸く意識の頂点に達せんとする時、作家時に一服の清涼剤を投じて人をして苦悶裏に蘇生せしむ」

漱石の作品において、女性の配置の仕方を見ると、この「緩勢法」の技法が使われていると考えられる。すなわち、「陽の女」は「緩勢法」の説明にある「意識の劇しき醒覺の状態」「蒲焼」にあたり、「陰の女」は「睡眠」「漬物」にあたりと考える。

漱石の描こうとする対象は、あくまでも「陽の女」であるから、「陽の女」のアクが弱まる程、「陰の女」の存在価値はなくなるわけである。

（注1）

江藤淳編『朝日小事典 夏目漱石』毎日新聞社、一〇三頁（一九七七年六月一五日）

（注2）

『草枕』は、本論にも書いたように、非人情の世界を描いたものであり、俗世間での恋愛感情は存在しないため。

平成元年11月27日受付
平成元年12月20日受理